

氏名	なか ざわ てつ 哲
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第54号
学位授与の日付	平成18年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育科学専攻
学位論文題目	カントにおける良識の思想と道德教育の方法論

論文調査委員 (主査) 教授 鈴木 晶子 教授 矢野 智司 助教授 齋藤 直子

論 文 内 容 の 要 旨

「カントにおける良識の思想と道德教育方法論」と題する本論文は、カントの道德哲学展開の思想を、その哲学思想展開の思考様式、方法に注目しながら分析することを通して、カントの道德哲学のうちに、道德教育の方法論に関する思想を浮き彫りにしようと試みた教育哲学・思想史の研究である。

研究の手続きとしては、カント批判期道德哲学の著作『人倫の形而上学の基礎づけ』(1785)に登場する二つの概念、すなわち「gesunder Verstand 健全なる悟性ないし良識」と「gemeiner Verstand 普通の悟性」という概念に着目した。この概念は、その後のカント道德哲学の展開において、起点ともなった概念である。この概念を中心としながらも、カントがその意味内容を敷衍させていった隣接の関連概念をも分析の対象としつつ、カント前批判期の一連の著作において、それらの概念がどのような意味あいや用法で登場しているかを明らかにすることを通して、カントの思考様式や方法をその思想展開の過程の中で再現しつつ、そこに道德教育の方法論ともいべきものを浮き彫りにしようとした。

前掲『人倫の形而上学の基礎づけ』においてカントが提示する悟性ないし良識に関わる概念は多様な形をとって用いられている。それは「ごく普通の悟性」、「普通の人間理性」、「自然な良識」、「普通の道徳的理性認識」などである。健全なる悟性および普通の悟性という形で表現される意味内容を本論文では広く「良識」(また訳者によっては常識)として捉えている。この捉え方によって、カント前批判期における思想、とりわけ1760年代のカント道德哲学で最も特徴的なこと、すなわち啓蒙後期にあって、いわば遅れた近代啓蒙運動が上からの近代化とともに波及しつつあった当時のドイツの状況を鑑みつつ、カントが提示しようとしていた道德哲学の意図が明らかになる。それは、伝統的な形而上学のドグマチズムに対する人民一般のうちに宿る「常識」の尊重であり、一部の学者にのみ限定されてしまっている学問至上主義ではなく、市民としての「良識や常識」に立脚した道德のあり方を模索しようとする立場である。

このような一般市民のもつ常識や良識から道德を捉えていくというカントの立場はまた、単に道德哲学の問題であったと同時に、道德教育の方法に関する彼の模索の出発点でもあったことに本論文は注目する。カントの道德教育の方法論に関する思想は、『実践理性批判』第二部および『人倫の形而上学』(1797)第二編で主に展開されている。本論文ではなかでも後掲の『人倫の形而上学』を主たる考察対象とすることで、そこで紹介されている「道德教理問答」にみるその方法論を明らかにしようとした。

つまり、カントの道德教理問答を考案した背景には、人間には誰にでも、自ら道徳法則に従うようになっていくという、その方位決定を自らに課すことは実は可能なのだという確信があった。そして、あらゆる人間には、自らをそうした道徳的な方向へと進んでいくことを促していくようなあるもの、つまり「自然的な意識」があるというのである。道徳的な規則にしたがって実行していくための力、そうした有徳の人間となるためにカントは道德教理問答を考案したという。道德教理問答は、子どもの心を道徳的尊厳と事物の価値とが本質的に異なることをわからせるという形で子どもにとって教育的な働きをなす。強制にならずに、子どもの内面にその人間としての尊厳を傷つけるような踏み込みをせず、しかも自ずと道徳的価値

値を認識し、自らも道徳的に行為するような人間となり行くために教育ができる唯一のこと、それをカントは道徳教理問答という方法にゆだねようとしたというのである。

論の展開は以下の通りである。まず、『人倫の形而上学の基礎づけ』にみる道徳哲学と『人倫の形而上学』にみる道徳教育の思考法とを比較検討することで、その連関のうちに彼の道徳教育の方法論を再構成している。

次に、カントの道徳哲学展開の起点である「健全な悟性（良識）」や「普通の悟性」およびその関連語を前批判期の諸著作に遡って考察している。この考察を通して、批判期の道徳哲学展開の思考法への萌芽が、『神の現存在の論証』（1762）の序文に始まること、1759年の『オブティミズム試論』における *gesunde Vernunft* ならびに *gemeiner Verstand* に関わる用法と、1760年代以降にみられる *gemeiner Verstand* の用法の間には転換がみられること、カントの思考が J. J. ルソーの「良識」や「理性」に関する思想と密接な関係にあることが提示されている。

そして、最後にルソーの良識や理性に関わる思想の継承という観点からカントの道徳哲学展開の思想を捉えることを通して、道徳教育の方法論に関するカントの試みを再検討している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、以下の点で評価できる。

1) まず、カントの思想研究一般にとつての意義という点からすると、良識ないし悟性 *Verstand* という概念がカントの道徳哲学の思想においてどのような意味内容をもたされ、またその道徳哲学の思想の発端をなすとともに、思想展開の機動力ともなっていたプロセスを、単に良識ないし悟性で表示された概念だけに固定せず、いわば作業概念としてカントがその *Verstand* あるいは *Vernunft* という概念を駆使しながら、概念史の手法を用いて分析した。このことにより、彼の道徳思想をその展開過程のうちに明らかにすることが可能となり、いわゆるボトムアップ型の英米系啓蒙思想運動と比較しつつ、ややもすると学者や啓蒙された人々など一部の主導的立場による上からの教化というトップダウン型啓蒙であると理解されるドイツ啓蒙思想を基本としながら、カントがルソーの良識や理性に関わる思想を踏まえて、一般市民のもつ良識ないし常識を手がかりとした道徳を構想していたことが明らかとなってきた。

とりわけ、1750年代末と1760年代以降との間に指摘されるカントの良識観の転換、つまり、学者において可能な学問的認識によって可能となるものとしての良識から、市民一般に可能な常識としての良識への転換をめぐることは、これまで浜田義文、福谷茂をはじめカント先行研究者の間でも、それを転換と明瞭に呼び得るものか、それとも揺れと捉えるべきか、また転換と呼び得るとしたらそれを招いた契機は何か、などについて様々に解釈が分かれている。こうした先行研究における議論を踏まえつつ、本論文は、カントがルソーの著作を通して受けたいわゆる1762年夏の衝撃に注目しながら、その良識観の転換について新たな解釈を試みている。カントの啓蒙思想における学者や市民の役割にまで及んでいくこの良識観の転換についての解釈は、市民の良識を前提とした道徳教育の可能性を探るカントの教育思想を解明していく上でも、重要な鍵となるべきものであった。

2) 次に、教育思想という観点から次のような意義を認めることができる。外からの強制が内なる自己啓蒙の自発的な状態へと変化していく人間の生成過程において、果たして人間は他の人間にどのように働きかけることができるのか、働きかけを最小限にとどめることは可能か？という問い、また、こうすべきであるという道徳の法則をこうしようという行為へと方向づけていくという、道徳教育の方法に関する問いは、現在にいたるまで古くて新しい問いである。本論文は、徹底的に外からの働きかけなしに個々人の良識に基づいて自らの主人となり行く過程についての、カントの道徳教育の方法に関する基本姿勢を、その道徳哲学思想と関連づけながら浮き彫りにした。そして、子どもの人間としての尊厳を尊ぶがゆえに、外からの強制ではない道徳教育の可能性を、カントが道徳教理問答の形式にみようとしたことにも光を当てたといえる。

以上の考察は、カントに関する哲学・思想一般の研究領域において蓄積された知見に対して、概念史的手法を用いることを通してその思考方法を探ることにより、彼の道徳教育に関する方法の展開との連関を読み解いた点で、従来の教育思想・哲学におけるカント研究に一石を投じたといえるだろう。

だが、未だ十分にその研究企図が展開しきれていないところも散見される。宗教教育において近世以来用いられてきた教理問答の形式に、カントはなぜ、どんな思考プロセスを経て到達したのか、また、その古い伝統をもつ形式を、18世紀末の

新たな啓蒙の時代に見合うため、どのような工夫を加えたのか、さらに、その道德教理問答において、良識や悟性、理性に関するカントの思想発端がその形式において、どんな連関のうちに働いていたのか、といった諸点は十分に展開されていたとはいえない。また、前批判期の著作を順に扱うという文献学的な論の運びになっており、概念史的なアプローチを最大限生かすためには、内的な連関構造から主題別にカントの思想を再構成していくという形も有り得たのではないかと考えられる。とはいえ、これは、学位論文としての価値を損なうものではないと評価した。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成18年2月8日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。